

# 宮本常一の観光文化論

谷沢 明

宮本常一先生（1907～81、以下宮本という。敬称略）は、民俗探訪で日本中を旅して歩き、民衆の生活文化を熱いまなざしで見つめ、それを掘り起こすとともに地域の盛り上がる力を育てようとした民俗学者である。同時に、観光文化を地域の振興、人間の交流という視点で捉え、1960年代から70年代にかけて観光の在り方について先駆的な発言を行った。そして、日本観光文化研究所を設立して観光文化発展に向けての実践活動を試みた。

観光文化に対する宮本の考え方は、今日の観光の在り方を振り返るに当たり示唆を与えてくれる。それは、①観光による地域文化の振興、②旅のもつ文化史的意義を改めて考えさせるからである。また、そこには、観光文化研究において原点ともなるべき考え方が見られ、今もひととき光彩を放っている。

学生を引率して教育活動の一環として行うフィールドワークの旅、それをより質の高いものにしたいと願う私にとって、宮本が観光文化・旅に抱いていた考え方を学ぶことは、教育方法改善につながる一つの手がかりをも与えてくれる。

本稿は、①宮本が観光文化をいかに捉えていたか、②どのような背景でその考え方が形成されたか、③いかなる理念を抱いて観光文化振興の実践活動に当たろうとしたかの三点に焦点を当てて、その著作を通して宮本が考えていた観光文化について整理することを目的とする。

## 1、観光への視座

宮本は、1960年頃から観光開発が地域社会に及ぼす影響について強い関心を持ち始めた。それは、国民所得倍増計画（1960年）による高度経済成長が始まり、生産の機械化に伴う労働時間の短縮により余暇時間が増えた時代を背景とする。また、道路網や交通機関の整備により観光旅行を楽しむ人口が増大し、観光旅行ブームが到来したことに呼応している。

宮本は、この観光旅行ブームが、地域社会にとってはたしてどのような意味を持つのであろうか、と問題提起をしている。高度経済成長を象徴する出来事である東京オリンピック開催で沸き立つ1964年に著わされた『離島の旅』<sup>1)</sup>の中で、観光旅行ブームについて次のような見解を示している。

「今日観光ブームといわれているが、観光客がいったいどれほど観光地に住む人たちの邪魔をしないで寄与しているであろうか。その生活を破壊する側にまわってはいても、その生活を助ける側にまわっているものは少ない。これは観光が観光客本位のものであって、観光地はいつも利用される側にまわっていて、観光地が資本家の手によって植民地化されているためである。（中略）地方の資本がのび、それが植民地主義に対抗して、地方文化・経済が自立できるようになってほしいものだと念願する。その方策のたてられない限り、地方はいつも食べ物にされ、犠牲にされつつ、文化の恩恵というものをゆがめられた形で

うけることになる。」

かなり激しい口調の一文である。そこには、長い間全国各地を歩き回って民衆の生活を見つめてきた宮本の、まじめに働いている者の世界を心ない人たちの見せ物にしたくない、という気持ちが込められている。そこでは、資本家の手によって侵食されつつある観光地のあり方を批判するとともに、地方の資本がのびて地方文化・経済が自立できるようになるのが本来の姿である、との主張がみられる。また、同書を書いた動機として、次の一文も掲載されている<sup>2)</sup>。

「地方をおとずれる人の中に、ほんとうに地方の生活を見、そこに住む人々の生活に深い関心を持ち、地方文化開発の協力者になって下さる人も少なくないであろう。(中略) そういう人たちには僻地の民衆の生活や歴史がどういうものであるかを知っていただきたい。そして地方の民衆の生活に眼を向け、またよき相談相手にもなっていただきたい。今日ほど地方の人びとが知識を必要としている時代はなく、今日ほどその貧乏を感じている時代はない。ラジオやテレビや新聞で得られる知識ではなく、今日現在の生活をその地でたてていくにはどうすればよいか、という具体的な問題を共に考えてくれる人がほしいのである。」

観光人口が増大する中で求められているのは、地方の生活を見つめ、そこに住む人々の生活に深い関心を持ち、地方文化開発の協力者になってくれる人である、と呼びかけている。今日、観光を交流として捉える考え方が生まれているが、その視点が読み取れる。また交流といっても、真に求められるのは、その地で暮らしを立てていくにはどうすればよいかを共に考えてくれる人であり、地域振興に何がしかのヒントを与えてくれる旅行者と地域住民の交流が大切である、と述べている。この考え方は、地域活性化の効果、それも主として経済効果を念頭において論じられている今日的な「観光による交流人口の増大」とは明らかに一線を画している。

この観光旅行ブームと同時に到来したのが観光開発である。高度経済成長期、とりわけ外部資本が行う観光開発と、それを誘致しようとする地元の動きが顕在化した。これに対して、宮本は厳しい矛先を向けている。1964年の論考「日本列島にみる中央と地方」には、耳の痛い指摘がなされている<sup>3)</sup>。

「最近では観光設備に血の道をあげているところが少なくない。観光客が来さえすればその土地が発展するように考えてのことであるが、しかし観光施設ができて、地元の人でそこを利用し得るものは何人あるのでしょうか。豪華な観光ホテルは都市から来た観光客のものであり、また観光客のおとす金は外部観光資本がもっていつてしまう。」

外部資本による観光開発の批判はもとより、これを歓迎しようとして浮き足だっている地元民、その状況の中で自主性を失いつつある地元民、と地方の在り方にも警告を発している。

自主性の喪失は、単に外部資本による観光開発のみを指すのではなく、地域文化の在り方、さらには中央と地方の関係の在り方に対する警告でもあった。その地域文化の在り方に対して反省を促す一文もみられる<sup>4)</sup>。

「こうした政策<sup>5)</sup>が地方資本を壊滅させ、地方文化の発展の芽をとめ、地方の生産エネルギーをうばい、やがて国内植民地をつくりあげてきたのである。(中略) 在住民たちにとっては自らが生み出した文化ではなく、支配者に強いられ、また真似たものである。同様に、今日仮に新しい地方文化が存在するとしても、それは地方民の生み出したものでは

なく中央に真似たものであって定着性はない。たえず浮動している。」

地方が中央に頼り切った社会の在り方は、文化そのものまでも根無し草にしてしまった、との指摘である。この論考の背景にあるのは、高度経済成長政策に伴う地方の衰退である。そこには、農村は都市に、地方は中央に奉仕し続けて、都市は地方から生産エネルギーを吸い上げて今日の繁栄をつくりあげていったが、はたしてそれでいいのであろうか、という問題意識が潜んでいる<sup>6)</sup>。この時期、地方が中央に追随しようとしている姿を象徴的に現していたのが、陳情・工場誘致・観光問題であった。当時、離島振興の世話をしていた宮本は、国会議事堂や議員会館周辺で地方からの陳情団の姿を多く目にしており、その状況を次のように述べている<sup>7)</sup>。

「資金の面に枯渇を見せて来はじめた地方は、無限の力をもっている中央政府に頼らざるを得なくなる。地方におこっているもろもろの問題のほとんどは中央に陳情しなければ解決しない。(中略) 地方在住人口を、地方においたままでその地において生産エネルギーを爆発させるような政策はとれないものかどうか。現実には地方在住の民衆は自己の資本力にたよりつつ自己の居住地区を興隆させるほどの力をほとんど失ってしまっている。」

地方が中央に従属する関係に問題を投げかけるとともに、工業を起こしてそこに地方に蓄積されたエネルギーを吸収しさえすれば事足りるように考えてきた高度経済成長政策そのものについて批判している。宮本が各地を歩く度に実感したのは、中央と地方の格差であった。この格差が生じた原因は何か、これを解消するためには何を考えたらいいのか。もっと地方が生かされ、活気を帯びてくるには何が必要であるのか。それを考えなければいけない、という思いが伝わってくる。さらに、地方が自律的な生き方が可能になる政策が必要である、と説く<sup>8)</sup>。

「政治は国民全般を幸福にするために存在するものであり、そこには地方の生産、文化が中央のおこぼれによって、それに追随して発展するのではなく、地方の自主的な力によって発展する対策のとれない限り、僻地性の解消はありえないと考える。」

地方分権が叫ばれる昨今ではあるが、まさにその精神を高度経済成長の真っ只中で説いているのである。またそれは、政治の問題だけにとどまらず、同時に地方に住む人々の問題でもある、と 1965 年の論考「社会開発の諸問題」において指摘している<sup>9)</sup>。

「地域開発というものは、本当に自分たちの土地をどうしたらよいかという人たち、真剣に自分たちの土地の問題を、自分たちで解決しようという人たちが育ってこない限り、ありようがない。」

地域開発と、それに関連する観光問題、それは、地域が自主性をもって取り組むべき課題であり、気魄を持って取り組む人材を育てることが何よりも必要である、との語りかけである。これら一連の論考が発表された 1960 年代という時代の中で、人間が失ってはならないものは何か、という宮本の問いかけの本質が見えてくる。

## 2、離島振興と観光

宮本が観光問題に関心をもつようになったのは、余暇時間の増大に伴う観光旅行ブームの到来という時代背景のみならず、離島振興の仕事に携わっていたこととも深く関わりをもっていた。1953 年、離島の発展を促進するため、離島振興法が議員立法として制定され<sup>10)</sup>、宮本は、

離島振興法を推進するための組織である離島振興協議会<sup>11)</sup>の初代事務局長に就いた。自ら島に生まれた宮本は、その役を無給で引き受けたのである。離島振興法は、本来、離島苦を解消し、島内の生産を上げて島民の生活を安定させることを目的として制定された法律である。ところが、小さい島はどのように対策を立てても、島自体の力で本土並みの生活や文化を向上させることは難しかった。島の生産力に限界があったからである。そして、観光旅行ブームの潮流の中で、産業開発よりも観光開発を志向する島が多く出はじめた。その現実が、宮本をいやがおうでも観光問題に立ち向かわせることとなった。1975年の著作『旅と観光』で小さな島の持つ宿命と矛盾を挙げるとともに、離島と観光の関わりについて次の記述が見られる<sup>12)</sup>。

「島自体の生産資源とは言い難いけれども、本土の者が利用できるものがある。風景がそれである。風景がよいということは島人にとっては逆に生産力をにぶらせるものになっている。岩山や急傾斜や、屈曲の多い海岸は農業を営むにも、隣村へゆくにも多くの不便があるが、都人士はそういうところを景色がよいとして訪れる者が多かった。つまり生産力はあがらないが観光施設をすれば、観光客がおとずれ、その人たちのおとす金によって島民がうるおうという間接的な経済効果があがって来る。

これは一見大変よい方法のようにみえるけれども、第一に本土の人の気に入るような施設をしなければならないこと、第二に観光施設を島外の人がおこなうときは、利益の大半はその人たちが持ってゆき、おこぼれだけが島におちることになる。そういう矛盾をどうしたら克服することができるかを考えなければならない。そのことについてまだ本当の対策のたてられていないまに観光事業はすすみはじめて来た。」

宮本は、島を歩くたびに、生産と生活の低さがどこから来ているのか、またどうすれば離島苦から抜け出せるかを絶えず考えていた。離島振興に対する宮本の基本的な考え方と、どのような思いで離島振興の実践活動に当たろうとしたかを捉えることは、離島の観光問題を理解する上で不可欠である。離島振興協議会の機関誌『しま』に寄せた1955年の論考「おくれをとりもどすために」には、その基本的考え方が鮮明にあらわれている<sup>13)</sup>。

「みじめな村だから助けてくれというのではなく『村をよくするために、こんな計画をたて、こんなに努力しようとしている。それが村の生産や、生活をどんなにかえてゆくか』ということが、一応明らかにされているものであつてこそ補助金や融資は本当の効果をあげるのである。」

ここには、島民自らの力による振興努力が島を生気あるものにするために何よりも必要であり、それがあつてはじめて補助金や融資が生きてくることが述べられている。自らの力による振興努力のための一つの支えとしての国家投資が島を生かす、それが宮本の特論であつた。また、それは、宮本の言葉「法ができたから島がよくなるのではない。島がよくなろうとする時、法が生きるのである。このことを忘れてはいけない」に象徴されている<sup>14)</sup>。

1955年、全国の離島青年たちに呼びかけて第一回「全国離島青年会議」が開かれた。翌年、宮本は、機関誌『しま』に「全国離島青年会議に寄せて」を書いている。この文章には、全国の離島に暮らす青年に向けた宮本の熱いメッセージが込められている<sup>15)</sup>。

「諸君は諸君の島をどんなに育てあげようとしているのであろうか。文化を向上させ、生産をあげるということが、港をつくり、道路をつくるということだけと考えてはいない

だろうか。われわれのもっと知りたいことは、諸君が自分の島の持つ資源を発見し開発する努力と能力と方法の問題である。そこに明日への道がひらける。資源は眠っているものであり、それを見つけるのは人間である。人間が見つけない限り資源は資源でない。(中略) 資源は見つけることで生きて来るし、生かされるのである。そしてそういう工夫が生活を向上させる。しかしそれをおこなうための一人一人の力には限界がある。どうすれば大きい力を出し得るかを考えねばならぬ。(中略) 大事なことは、まず資源を見つけることである。こういう工夫は若いものでなければできない。それも一人ではできない。みんなで集まって空想をはたらかせてみることである。夢をもつことである。夢を現実にするにはどうすればいいか、ということから出発する。」

資源は人間が見つけることで生きて来るし生かされる、これは名言である。観光資源もまた宮本がいう「資源」の一つである。資源を生かす工夫が生活を向上させる。夢を現実にするにはどうすればいいかを共に考えようではないか、と青年たちに熱く語りかけているのである。

地域の持つ資源を発見してそれを開発する努力と能力と方法を皆で磨いていくこと、一人ひとりの力を結集して自らの手で積極的に取り組んでいくこと、それが離島振興と観光開発における宮本の基本的な考え方であった。

地域づくりは、地域の価値の発見から始まる。その価値を磨いていくのも人間である。そして、地域は人間自らが創りあげていくもの、地域の人々がともに手を携えて築いていくもの、そのような宮本の考え方は、今なお輝きを放ち続けている。

### 3、宮本常一にとっての旅・旅のスタイル

戦前から全国をくまなく歩いた宮本自身にとって、「旅」とは、はたしてどのような意味を持っていたのであろうか。宮本の観光文化論を考えるに当たり、これを抜きにして語ることはできない。宮本自身にとっての「旅」、それを一口で言い表わそうとしても、あまりにも対象が大きすぎる。ところが、宮本は、『旅と観光』の中で自分自身の旅をさりと語っている<sup>16)</sup>。

「私にとって旅は学ぶものであり、考えるものであり、また多くの人々と知己になる行動であると思っている。そしてともすれば固定化し、退嬰化していく自分の殻をやぶる機会を作るものだと思っている。旅をしたのしいのはよい人の心にふれることである。古美術にも心をうたれるが、何十段というほどつみあげられた段々畑の石垣にも驚嘆する。ましてそこで生活している人たちと話しあうことのできるのも大きな啓発になる。」

そこには、宮本自身にとっての「旅」とは何か、端的に纏められている。それは、「学ぶもの」「考えるもの」「多くの人々と知己になる行動」の三つである。また、宮本晩年の自叙伝ともいえる著作『民俗学の旅』には、その気持ちが飾らぬ言葉で表現されている<sup>17)</sup>。

「私自身にとって歩くというのはどういうことだったのか。歩くことが好きだったのである。歩いているといろいろなものを見、いろいろなことを考える。(中略) 人にあえば挨拶をした。そのまま通りすぎる人もあるが、たいてい五分なり十分なり立ち話をしている。それがたのしかった。その話というのはごくありふれた世間話であった。要するに人にあい話をするのが好きだったのだろう。同時にまた人の営みを見るのが好きだった。

(中略) どんなところにも人間の意思が働き、それが現実のものになっており、しかもそ

の意思には限界があり、限界が境を作っているのである。」

ここには、「歩いて、見て、話を聞く」という宮本流フィールドワークの原点が出ている。と同時に、宮本が旅で何を見ようとしたかも現れている。それは、「人間の営み」「人間の意思」であり、それを読み取る作業が宮本の旅であった。後年、宮本は、次の言葉を残している<sup>18)</sup>。

「自然は寂しい、しかし人の手が加わるとあたたかくなる、そのあたたかなものを求めて歩いてみよう」

人の手が加わらぬ大自然もいいが、宮本は、むしろ「人の手が加わった自然」に感動し、そこに「人間の営み」「人間の意思」を読み取ろうとしたのであった。この短い言葉の中に、宮本の自然観・人間観が凝縮されている。

ところで、このような人間の営みを見つめる宮本の旅のスタイルは、いかにして形成されたのであろうか。それを理解するためには、宮本が行った旅を振り返ってみることが必要になる。宮本は、『民俗学の旅』において、淡々とした記述で戦前の旅を振り返っている<sup>19)</sup>。

「途中は汽車を利用したが歩きはじめると歩けるところまで歩いた。そうした旅には知人のいることは少ない。だから旅に出て最初によい人にであうまで全く心が重い。しかし一日も歩いているときつとよい人に会おう。そしてその人の家に泊めてもらう。その人によって次にゆくべきところがきまる。その人の知るよい人のところを教えてもらう。そこへやっていく。さらにそこから次の人を紹介してもらう。」

今から考えると、いかにも浮世離れした旅のスタイルである。1939年10月、澁澤敬三<sup>20)</sup>が主宰するアチック・ミュージアムに入った宮本は、1944年1月、疎開のため大阪に戻るまでの4年余り、澁澤邸に居候をしながら精力的に戦前・戦中の村々を歩く旅を続けた<sup>21)</sup>。アチック・ミュージアムに入って最初に行ったのは、中国山地を巡る旅であった<sup>22)</sup>。その時の旅の記録が「土と共に」と題して『村里を行く』(1943年)に収められている。戦前・戦中にかけての宮本の膨大な旅の記録は戦災で焼失しているため、活字として残された戦前の宮本の旅のスタイルを伺い知る貴重な資料である。

「今私のやっている仕事は、日本民俗の採訪調査をして、その報告記録を書くことである。採訪調査と言っても計画的に調査目標と項目を定めて行う場合は少なく、足にまかせて農山漁村を歩き、昔のことにくわしい人を訪ねて、その語るところを聞くという程度である。したがって話す方のその時の調子で、私の予期予定していないことを聞く場合が少なくない。(中略)しかしながらその採訪旅行の途次において、私の心にしみこんだ村人の情や、感銘の深かった話や、黙々としてよき国土たらしめようと努めておられる人々の姿に接した場合は少なくない。(中略)黙々としかも孜々と働いているのである。しかし烈々たる情熱を持って、よりよき村の生活を打ちたてるためこう尽くしておられるのであって、こういう話こそ一般の人々にはお伝えすべきであると思っている。」

このような書き出しで始まる『村里を行く』<sup>23)</sup>には、民俗採訪の旅で接したごく普通の人たちとのやりとりが、じつに生き生きと記録されている<sup>24)</sup>。

「古風な人たちの好ましさはこんなところにある。その情にあまえてばかりいてはならないのであるが、私が旅を愛するのは、全くこういう人の心にふれる喜びも大きな原因であった。(中略)宿から宿への旅であればその土地の人々の心に直接ぶつかり得ることも

すくないし、またお膳の上に並べられた食物にも町と田舎の差が少ないのである。町の生活をそのまま田舎へも移しておいて、旅行にさいしてはそういうところばかりで寝泊りするのも旅を遊山と心得る者にはよいわけだが、また昔ながらの旅も許されてよいように思う。それが村の人たちに多くの迷惑をかけるものでなければ…。」

宮本は、民俗採訪の旅について、村人たちの日常の生活にふれて、ありのままの心情にふれて来るのが大切な目的、とも記している。宮本は、そのような調査態度に一貫してこだわった。また、このような調査方法が科学的だとは言えないと断りつつも、効果があった、と記す<sup>25)</sup>。

「それが予期せぬものを得ることがあるだけに喜びも大きい。またこの村にもわれわれを迎えてくれる人がいる。(中略) 日本とはそういう国であると思う。」

見知らぬ民衆に寄せるゆるぎなき信頼感、それが宮本の旅を終始支えていたものであろう。このように、書物の上でなしに現実生きて人々の生活にふれ、日本人とは何かを正しく理解すること、それが宮本の目指す旅であった。

戦後の1946年4月から、宮本は再び村々を歩いた。その多くは農業技術指導の旅であった。戦後間もない宮本の旅は、講演を頼まれては各地に出向き、そこで旅費を稼ぎつつまた旅を続けるというスタイルに変わった<sup>26)</sup>。そして、戦後の村々における多くの農民との交流の中で、その後の宮本の民俗調査の方向性が形づくられていった。『民俗学の旅』から、それを物語るいくつかの記述を拾い上げてみよう<sup>27)</sup>。

「百姓たちと生活をともにし、その話題の中からその人たちの生活を動かしているものを見つけてゆこうとすると、項目や語彙を中心にして民俗を採集するということにはできにくくなる。何となく空々しい気持ちになる。それよりも一人一人の人の体験を聞き、そしてその人の生活を支え、強い信条となったものは何であつたのだろうか、生活環境はどういうものであつたのだろうかというような話題も眼も向いていく。」

いわゆる従来の「民俗調査」とは一線を画した、生きた人間の生活に関心が向いていったことが分かる<sup>28)</sup>。

「田や畑を百姓たちといっしょに歩いてみる。そうしたことからお互いが啓発されていったのであつた。そうした生活の中にそれぞれの人の信条があり、その信条は生活の習俗につながるものが多かった。習俗といい民俗というのは日常生活からきりはなされて存在するものではなく生活の中にあるものである。」

後年、宮本は、世間から「宮本民俗学」といわれる独自の民俗学を樹立するが、これらの文章の行間には、人間を凝視する姿勢が漂っている。これら戦前の民俗採訪の旅、そして戦後の農村を歩く旅を学問として深化させていくきっかけとなったのは、澁澤敬三が提唱した九学会連合の総合調査への参加と、そこでの大勢の研究者との交流にあった。戦後、世の中が落ち着くと、宮本は、対馬総合調査(1950～51年)、能登総合調査(1952年)の九学会連合調査をはじめ、西海国立公園候補地のための長崎県五島調査など、精力的に学術調査に参加して学問形成を行うが、同時に、この時期、従来の民俗学に一つの疑問を持つようになった<sup>29)</sup>。

「日常生活の中からいわゆる民俗学的な事象をひき出してそれを整理してならべることが民俗誌というのは事足りるのだろうか。(中略) それら(民俗事象)はわれわれとどのようなかわりあいを持っているのであろうか。さらにまたいろいろの伝承を伝えてきた

人たちは、なぜそれを持ち伝えなければならなかったのか。それには人びとの日々のとまれている生活をもっとつぶさに見るべきではなかろうか。民俗誌ではなく、生活誌の方がもっと大事にとりあげられるべきであり、また生活を向上させる梃子になった技術についてはもっときめこまかにこれを構造的にとらえてみるのが大切ではないかと考えるようになった。」

昔の伝承を調べるだけの、いわゆる「民俗学」に飽きたらず、人々の生活そのものを向上させる背後の力に関心を寄せていたことが浮かび上がってくる<sup>30)</sup>。

「村を歩いていて年寄りたちばかりでなく、中年の人も若い人も一番関心の深いのは自分自身とその周囲の生活のこと、村の生活のことである。民俗学的な事象を聞くことについて喜んで答えてくれる人は多いのだが、その人たちの本当の心は夜ふけてイロリの火を見ていて話のとぎれたあとに田畑の作柄のこと、世の中の景気のこと、歩いてきた過去のことなど、聞かれて答えるのではなくて、進んで語りたい多くを持っていることであった。人はそれぞれ自分の歴史を持っているのである。まずそういうものから掘りおこしていくこと、そして生きるというのはどういうことかを考える機会をできるだけ多く持つようにしなければいけないと思った。」

これは、まさに、津々浦々を歩き、多くの民家に泊めてもらった体験から出た言葉であり、従来の民俗学の枠を超えた宮本の学問の方向性を示す一文ではないか。各地の人々の生き様を見つめることによって真の日本の姿を知り、多くの人に接することで日本の民衆の英知とエネルギーを理解しようとする、それが宮本の目指す旅であったといえよう。

#### 4、宮本常一の旅を育んだ風土

故郷の風土はそこで育った人の人間形成に影響を及ぼす、といわれる。ここでは、生まれ育った風土が、いかに宮本の旅を育んだかについて整理してみたい。宮本の生家は、山口県周防大島町(旧東和町)の長崎集落の海辺にある。長崎集落の南には白木山が聳え、集落背後に段々畑が築かれ、ミカン栽培が行われている。白木山に登ると、風光明媚な瀬戸内の風景が目の前に広がる。青い海に緑の島々が浮かぶ心とむく光景である。宮本は、この穏やかな瀬戸内の風土の中で生まれ育った。この瀬戸内の海が、人々を旅好きにした、と宮本は最初の著作『周防大島を中心としたる海の生活誌』(1936年)で述べている<sup>31)</sup>。

「島の人を出歩き好きにしたのも、海の力が大きかったようだ。少し高い所へのぼれば、南の海も北の海も見えた。そうして海の彼方には山々が重なりおうて、晴れた日などはその山の彼方が心をひいた。夕方山から帰るさ道伴になった近所の男をさそって、海の向こうの宮島へまいることを計画し、ついでにもう一人をさそって、夕飯をすまして、船で夜をこめて出かけ、宮島へまいり、ついでに広島へ足をのぼし、ここまで来たのだからといって出雲まで歩き、帰りは備前をまわって来た、というような気軽な旅をする者がいく人もいた。(中略) 実際島の上に住んでみると、そういう心は湧くものであった。(中略) とにかく、島の外のはるかなる境に思いをはせる心は島人の誰にもあったようである。」

昔は、おそろしく呑気な旅をする人たちがいたものである。『中国風土記』には、この宮島詣での話がさらに詳しく出ている<sup>32)</sup>。その後日譚として、島の男たちは、女房の心配をよそに

一週間ほど旅をして帰ってくるのであるが、金を一文ももたなくても旅先には泊めてくれる家があり、飯を食わせてくれる人がいた、という。幼いときこの話を聞いた宮本は、「自分もそんなに歩いてみたい」と、微笑ましい感想を一言書き添えている。何はともあれ、海の持つ誘惑が島人たちを旅にいざなったのである<sup>33)</sup>。

「朝の空気のよくすんだ日などは、中国地の海岸を走る汽車の煙が見え、また汽笛のきこえることがあった。六里の海はかくまでに静かであった。石垣にもたれて、自分もあの汽車に乗りたいものと思った。海の持つ誘惑は、かくて島の人々を島から連れ出したのである。」

海は外と島を隔てるものでなく、外の世界を繋ぐものであった。そして、島には移動を苦にしない人々が住んでいた。宮本が旅に明け暮れ、旅が人生となってしまったのも、そのような瀬戸内の風土が大きく影響を及ぼしていたに違いない。

しかし、瀬戸内の島の人たちは、単に、あこがれだけで旅をしたのではなかった。江戸時代半ば以降、甘藷の普及で人口が飽和状態に達した島では、働き口を外の世界に求めることが早くから行われていた。男は大工・木挽・石工などとなり、さかんに他国に稼ぎに出るようになった。一方、島の女たちも年頃になると家を出て奉公に出かけることが多くみられ、農家の麦刈り、綿耕作、稲刈りの手伝いなどに娘たちが三人五人で組を組んで出かけていった。

宮本は、何の紹介状も持たずに足にまかせて農山漁村を歩いた。そして、昔のことにくわしい人を訪ねてその語るところを聞いた。また、行った先々で話を聞いた人の家に泊めてもらい、そこで次の行き先が決まるといった、旅のスタイルであった。ここには、まさに瀬戸内の風土に育まれた一人の人間のひょうひょうとした姿があらわれている。

## 5、旅の文化を探る

宮本にとっての旅は、訪れた土地の人々の心にふれ、その土地から学び、自らの思索を深めるものであった。「旅で学ぶ」、このことについて宮本は、朝日新聞（1969年1月16日）に、次の記事を寄稿している<sup>34)</sup>。

「古いことばであるが、『かわいい子には旅をさせ』というのがある。その人たちのいう旅は、せまい世界、せまい家の中にとじこもっていたのでは人生勉強にはならない。人生勉強をするためには旅をしてくることだ。今一つ旅は苦勞の多いものであり、人の情けにすがらねばできぬものである。その旅によって、自分のいままでおかれた世界や観念をつきくずしてもっと広く深いものが得られると考えたのである。（中略）旅で学ぶということは、旅先で、そこに生きている人びとの生き方にふれてみることであった。（中略）多くの旅人は新しい知識を持って来てくれたし、炉端をにぎやかにしてくれた。通りあわせの人を快くとめたのもそのためであろう。（中略）こうした旅人の多くは、単なる旅人ではなく、旅先の人たちの味方でもあった。だからいつでも相談相手になったのである。また相談したい人たちがいたるところにいるのである。それはいまもかわりない。旅人と旅先の人たちの結びつきはそうしておこったものであった、それがまた意外なほどつよい。

いま旅行する人は多くなっただけで、このような心のふれあいは少なくなっただけでゆきつつあるのではなからうか。地方をあるいてみると、いたるところで観光開発と観光客誘致の

構想を聞く。観光によって地元の人は何をしようとしているのであろうか。」

人々の交流をもたらす旅は、地域文化の発展に大きな役割を持っていたことは、宮本が随所で説くところである。宮本は1965年以降、日本人の旅の歴史について、『日本の宿』（1965年）をはじめとし、『大名の旅』『旅の発見』『庶民の旅』『伊勢参宮』『野田泉光院』『菅江真澄』など多くの書物に纏めている。地方には旅人の来るのを待っている気風があり、訪れる旅人を心から歓迎して旅人の持つ知識、技能を吸収することで地域文化が高まりを見せた、という見方がこれらの書物には一貫して流れている。また、民衆がともに助け合い、支えあうことで、たいてい金を持たずに旅をすることができる環境がつくられており、人々の交流の中で人間同士の信頼関係が育まれていった。宮本は、そこに旅の文化史的意義を見いだしている。旅が地域社会にどのような影響を及ぼすか、それは宮本にとって最大の関心事であった。

「社会開発の諸問題」に、「無用の徒」という、宮本特有のとぼけた一文が出ている<sup>35)</sup>。閉塞した地方を活性化させる「風」を吹き込む役割を「無用の徒」が持っていたのではないか、という指摘である。宮本自身、澁澤家に23年間居候をして、各地を歩き回っていた人間であった。文化が日本の隅々まで行き渡った時代は、この「無用の徒」がぶらぶら歩き回っていた時代ではなかったか、という視点である。やや冗長な部分もあるが描写がふるっているので、紹介したい。

「たとえば松尾芭蕉という人は、誰に頼まれたのでなくても、奥の細道を歩いたのです。時には宿屋で泊まるのを断られたりしたけれども、とにかくあるき廻って俳句をひろめています。連歌師の宗祇や宗長、宗牧にしてもみんなおなじです。また地方の人もそういう人を快く迎えて知識を吸収しました。

それは今でもあると思います。私が民家へ泊めてもらった数だけでも千軒に上っております。歩いた日数が四五〇〇日ですから、その四分の一は民家に泊めてもらったわけです。この中宿錢を払ったのは二〇〇軒ぐらいでしょう。あとはみんなただで泊めてもらい、仲良くなって、今でも手紙をやりとりしているのが、沢山ありますし、いろいろの相談にもあずかっています。そして、昔はこれはおもしろい人がきたとなると、何日でも泊めて、絵を書かせたりしています。たとえば大分県中津には池大雅の絵が沢山残っております。その坊さんが優遇して、滞在させたので、あれだけの作品が残っているのでしょう。そして、それがその地方の日本画を起こしていくというように、優れた人たちがやってくることによって、その地方の文化が向上していくのであります。（中略）要するに、これといった仕事を持たない、うろうろしている者がいて、これがただで飲み食おうという魂胆をもってくれたおかげで、地方が開発されている点が大きいのです。（中略）無用の徒が、もっともっと地方をぶらぶら歩き廻ることが、結局地方の皆さんの自立性を打ち立てる基になるんじゃないかと思うのであります。」

旅人の果たす役割を、文化交流という観点から重要視しているのである。それは、旅人が新しい文化を運んでくるとともに、地域社会のエネルギーを高めていく上で大切な役割を持っていた、という考え方に根ざしている。

一方、宮本は、地域の魅力を世間の人々に紹介する役割として、旅する学生が存在に注目している。宮本は、泊まった宿で宿帳を見て、旅人の職業やどこから来たのかを調べることに関

心があった。たとえば、長崎県天草の古びた宿で宿帳をめくっていると、一つの傾向に気付いた。その宿は、1955 年以前は九州内の商人か役人が主な宿泊客であったが、1955 年を境に東京や京都の学生が目につくようになった。宮本は、「学生が来るようになるとそのうち観光客がふえますよ」と宿の人に話すのであるが、それから間もなく天草を訪れる観光客の数は急増したという。

宮本は、学生が行う旅を愛情を持って見つめている。たとえば、1964 年夏に北海道天売島から鹿児島県黒島にかけての離島を撮影旅行した法政大学カメラ部の学生たちの作品集『日本の島々』（角川写真文庫、1965 年）の出版に当たり、宮本は監修を引き受けるとともに、次の巻頭文を寄せている<sup>36)</sup>。

「学生の旅は素朴であった。宿へとまることは少なく、わずかばかりの伝手をもとめて民家へとめてもらったり、寺や学校にとめてもらったり、時にはテントを張ったりして目的地を歩く。宿へとまるにしてもたいていは安宿である。そして少しでも親切にされると心から喜ぶ。そういうことが因になって長い交際もつづけるようになる。（中略）こうして島を世間一般の人々に紹介した学生旅行者の功績もまた大きかったといわなければならない。」

リュックサックを背負い、民家に泊めてもらいながら土地の人々の親切にすがりながら民俗探訪の旅を続けた若き日の宮本の姿が、学生たちの旅と二重写しになっているような気分にとられる。宮本は、そんな新しい旅をリードする学生たちを評価し、限らない声援を送ったのである。これもまた、旅の意義を交流という視点に立って捉えたものに他ならない。

## 6、宮本の目指す旅の実践活動の場・日本観光文化研究所

宮本は、1965 年に武蔵野美術大学教授に就任するとほぼ同時期に、近畿日本ツーリスト株式会社の支援の下に日本観光文化研究所を設立した。この研究所は、最初に乱暴な結論を言ってしまうと、宮本がいう「無用の徒」を歩かせる組織であった。付け加えると、「歩かせるけど食わせない」研究所であった。そんな、世間からしてみると何とも理解し難い研究所が、なぜ近畿日本ツーリスト株式会社という企業の金を使って立ちあがったのであろうか。また、宮本はそこで何をしようとしたのか、さらに、このような一文の得にもならぬ研究所に前途ある若者が何を好き好んでわんさと押しつけてきたのであろうか。

ことの起こりは、1964 年 12 月、宮本と熱海の老舗旅館の主人・大野藤之助が会ったことによる。近畿日本ツーリスト株式会社、そして大野が世話をしていた同協定旅館連盟が十周年を迎えるにあたって、宮本は旅館の歴史を纏めた本を書いて欲しいとの依頼を受けたのである<sup>37)</sup>。この出会いが、宮本が多くの若きフィールドワーカーを育てた日本観光文化研究所を生み出す縁をつくったのである。その出会いについて、大野藤之助は追悼文集『宮本常一―同時代の証言』に一文を寄せている<sup>38)</sup>。それは、宮本の旅についての考え方を知る上で参考になる。

『ぜいたくな、大名旅行のようなものは旅ではない。大衆が安易な気持ちでブラリと出掛け、或いはお百姓さんの家に一宿一飯の厄介になりながら、そこのあるじと語り合っているのは埋もれている話を聞くような旅をすることが正に旅の真骨頂です。（中略）』とすっかり（宮本は）上機嫌になられ、即座に執筆されることを快諾されたのであった。」

このようにして『日本の宿』をはじめとする「旅の民俗と歴史」シリーズ全 10 巻（1965～77 年）が近畿日本ツーリスト株式会社および同協定旅館連盟の共同企画によって生まれたのである。そして、最初の『日本の宿』の執筆が機縁となって、宮本は近畿日本ツーリスト株式会社の馬場勇副社長と会うことになった。馬場勇副社長は、近畿日本ツーリスト 10 周年記念事業の一つとして、観光に関する研究所の設立を考えていた。そのときの会談の様相を宮本は次のように記している<sup>39)</sup>。

「副社長馬場勇氏にお目にかかった。氏はすぐれたアイディアリストであり、お話しているうちに共鳴する話題がきわめて多く、これからは労働時間よりも自由時間の方が多くなる。今までは自分の仕事にぶちこむことで自己の成長完成があったが、これからは自由時間の利用による人格形成の方が大きくなるのではないか、それにはその対策が考えられなければならない。その一つは人びとを太陽の照る下にできるだけ出してもらって、いろいろ考えたり、行動したり、その中で人間として成長していくようにすることも大切な条件の一つになるのではないか、というような話になり、これまでの日本人がそういう機会をどれほど持ったか、これからどうなっていくか、また観光資源とは何かというようなことを体系だてて研究していくことも必要でないか、『一つそういうことをやってみませんか』——『やりましょう』ということになって日本観光文化研究所が発足したのである。」

自由時間の利用による人格形成、1960 年代半ばに宮本はこれを社会的使命と捉えたのである。日本観光文化研究所設立の動きが具体化するのは 1966 年 1 月であった。そして、この時期を境に、宮本はこれまで培ったフィールドワークの蓄積をもとに、若者を育てる教育を展開することとなった。

日本観光研究所は、宮本没後七年間継続し、昭和が平成に改まった時に活動を停止した。その研究所の歴史を記した『観文研二十三年のあゆみ』（1989 年）に、馬場勇副社長から研究所設立の誘いを受けた宮本の構想が、次のように紹介されている<sup>40)</sup>。

「観光によって国民のみんなが日本や世界を見直せるようにしたいものである。そのためには一方で旅行者をリードし、情報を提供していくと共に、地方の側にはそれをどう受け入れさせるかを工夫し、アドバイスしていかなければならない。それがうまくゆけば地方と中央は、従来の生産や行政の構造とは異なった構造によって結ばれることになり、日本人の方向感覚のバランスを回復させることになるだろうし、地方は自己の保全と進路決定に不可欠の自己評価能力と自信を得ることができるだろう。」

ここには、観光を通じて地域社会を発展させ、地方に自信を持たせ、従来の地方と中央の従属的な関係に風穴を開けたい、そんな宮本の気分がみなぎっている。研究所の設立は、地域振興と観光文化の発展を考える宮本の実践活動の場であった。宮本は研究所の方向性を次のように示した<sup>41)</sup>。

「失われていく日本の伝統文化・自然など、もろもろの良さについては何らかの形で残す工夫をしなければならない。なぜなら、それこそが旅情の原点ともなるものであるからである。そのためにも観光に代表されるような人間の消費行動について、その意味や仕組みをもっと基本的な所から研究しなければならない。」

ここでは、失われていく日本の伝統文化・自然などを残し、観光資源として守っていく大

切さを説くとともに、自然を壊して観光開発を行う当時の風潮をきっぱり否定する宮本の観光地づくりの指針が明快に示されている。さらに、話は人材育成に及ぶ<sup>42)</sup>。

「その実践展開には多くの頭脳とエネルギーが必要になる。既成の研究者では不十分である。柔軟な目を持った若い人材を、たくさん幅広く育てるところから始めなければならない。その一方ではやはり既成の人材を活用することも必要である。地方にいて真剣に取り組んでいる人びとの活用をはかりたい。」

観光文化振興の実践活動を始めるに当たり最初に必要なのは人材育成である、と宮本は説いた。この宮本の考え方は馬場勇副社長の共感を呼び、研究所設立が宮本に委ねられた。それは、企業が営利追求目的の一助として研究所を設立するのではなく、あくまでも、観光文化のあるべき姿を模索する知性をもった企業人・馬場勇、協定旅館のまとめ役である大野藤之助、そして宮本の信頼関係の上に立った、損得を抜きにした話であった。

研究所が看板を上げたのは、1966年4月のことであった<sup>43)</sup>。所長の宮本は非常勤の嘱託で、実務は常一の長男である宮本千晴が事務局長として引き受けることになった。その事務局長もまた嘱託であった。日本観光文化研究所は、常勤の研究員がいない研究所であった。そして、全国各地に、研究所の運営を支援してくれる同人を求めた。ある意味では、澁澤敬三が戦前に組織したアチック・ミュージアムの運営とも似ている。

研究所設立の1966年4月、宮本は、全国各地で研究や実践活動にあたっている120余人に宛てて、研究所設立の挨拶とともに、同人としての協力依頼を行った。むろん、人選は、宮本がこれまで旅で出会った人との人間関係が基礎になっている。その挨拶状には、研究所設立の目的・理念が鮮やかに記されるとともに、観光文化振興に向けて宮本が目指そうとする活動内容が記されている<sup>44)</sup>。

「観光の国民消費生活にしめる位置、社会学的、経済学的な研究、観光自体の究明等について体系的な調査、研究はほとんどなされておられません。したがってそういう分野を開拓して、国民消費生活のあり方、観光資源の開発、地方文化保存などについて示唆あるいは貢献することは目下の急務と考えます。このことなくしては、むしろ真の観光資源は荒らされ、地方文化はその光彩を失ってゆくのみではないかと存じます。

それゆえこの研究所は左記のような事業を目標として運営をすすめてゆき、単に研究所自体の発展を希い願うのではなく、むしろ地方文化の高揚、発展を願いともども相携えてゆきたいと思います。」

地域文化の高揚と発展を願った観光資源の開発および地域文化の保存、それが観光文化振興にむけて宮本が取り組もうとした内容である。そして挙げられた事業は、次の五つである。

- 1 地方文化に関する文献（フィルム、写真等を含む）資料（とくに民具、民芸品）の蒐集一ゆくゆくはその展示、展覧をはかる。
- 2 観光および地方文化（とくに観光資源として発見、開発、保存、紹介すべき文化）についての基礎的、応用的調査研究
- 3 地方博物館、研究者との連絡提携
- 4 観光その他地方文化に関する図書の出版
- 5 地元の文化、観光開発についての助言、協力

このような宮本の考えに共鳴した若い人間が大勢研究所に集まってきた。誰が所員であり、誰が所員でないのかは曖昧模糊としていた。しかし、宮本は、出入りするすべての若者を「所員」であると考えていた、という。そして、彼らが、宮本が若い頃に歩いたように、名も知れぬ土地への旅を試みるのであった。まさに「無用の徒」を歩かせる素地が研究所設立により誕生したのである。

旅好きな若者、それも世間の枠に収まりきれぬ人たちが宮本の主宰する日本観光文化研究所に集い、ともに研削を重ねていった。そこには、「来るもの拒まず、去るもの追わず」の気分が流れており、所長・宮本もまた、これをよしとしたのである。

そこで宮本が目指したのは、若い者をおだてて歩かせ、地域に生きる人々と交流させ、旅の面白さを一人でも多くの人に伝えるということであった。それがやがて波及効果をもたらした観光文化の発展に繋がるであろう、と考えていた。この観光文化発展に向けての取り組みは、宮本がその人生をかけて行った旅を通して地域の人々から得たものを若い旅人に伝え、彼らを育てることによって社会に還元しようとする気持ちから生まれた宮本の夢でもあった。

## まとめ

以下、研究目的に挙げた三点、①宮本が観光文化をいかに捉えていたか、②どのような背景でその考え方が形成されたか、③いかなる理念を抱いて観光文化振興の実践活動に当たろうとしたかを要約するとともに、若干の私見を述べたい。

宮本は、観光を地域づくりの一環、また人々の交流として位置づけていた。観光旅行ブーム到来の中で、宮本は観光客本位の観光の在り方に疑問を投げ、地域文化・地域経済の自立があつてこそ観光は成り立つ、という視点に立っていた。そして、当時の風潮である地方が中央に従属する関係を批判し、地方が自主的な力によって発展を遂げていくことこそあるべき姿であり、国家投資は地方自らの振興努力があつて初めて生きる、という立場をとった。また、宮本は、地域の人々が結集して魅力ある地域を創り、訪れる観光客も地域文化発展の協力者になってほしいと願い、人々の交流が観光文化発展に寄与することを期待した。

このような宮本の考え方は、宮本自身が生涯をかけて行った旅での見聞、宮本を育んだ瀬戸内の風土、また旅の歴史を深く学び取ることにより形成された、と考えられる。澁澤敬三庇護のもとで戦前から行われた宮本の旅は、村人たちの日常生活にふれ、地域に生きる名もない民衆のありのままの心情を受け止め、日本人とは何か、また真の日本の姿を知ることにあつた。そして、多くの人々に接することにより、民衆の英知とエネルギーを嗅ぎ取っていった。この宮本の旅は、訪れた土地の人々の心情にふれることを通して、その土地から学び、自らの思索を深めるものであった。宮本はこのような旅を通して、村々には訪れる旅人を心から歓迎して、旅人の持つ知識・技能を吸収する気風があり、旅人と旅先の人々の繋がりはきわめて深いものがあることを体感した。それは、宮本の旅だけでなく、先人たちの旅においても同じことがいえることをも確信した。そして、このような交流の中で、人間同士の信頼関係が育まれ、地域文化が高まりを見せていったことを読み取り、ここに旅の文化史的意義を認めた。

余暇時間が増大する中で、宮本は観光を人格形成の場として捉えた。また、これからますます盛んになると思われる観光旅行をよりよい方向に誘導することは社会的使命である、と考え

た。観光を通じて地域社会を発展させ、地方に自信を持たせ、従来の地方と中央の従属的な関係に風穴を開かせたいと願った。その根底には、「国の光を観ることが観光」であり、地域の宝を見つけてそれを磨き上げていくことにより、地域の人々が誇りをもつことが大切である、という考え方があった。その実践活動の場として、宮本は日本観光文化研究所を設立した。活動の理念は、地域文化の高揚と発展を願った観光資源の開発および地域文化の保存であった。ここでは、失われていく日本の伝統文化・自然などを残し、観光資源として守っていく諸活動を展開するとともに、宮本は若者を中心とする人材育成に力を注いだ。

1981年、宮本は旅に明け暮れた生涯を閉じた。それとほぼ時を同じくして、奇しくも宮本が願っていた地域主体による「ムラおこし」「まちづくり」「地域づくり」が、日本各地で繰り広げられていく。大分県で始まった一村一品運動（1979年）がその契機であった。時代背景として、高度経済成長から安定成長への時代の変化があり、量的拡大から質的充実を目指す、政策転換が行われたことが挙げられる。すなわち、地域の個性を守り、育て、磨いていこうとする、より地域を重視した政策が展開されたのである。やがて国は、それらの地域づくりの動きを支援すべく「まちづくり特別対策事業の推進について」（自治事務次官通知、1984年）を出し、これを契機に、「まちづくり」の動きは、国家予算の裏づけを得て、全国各地で更なる盛り上がりをみせた。

この流れの中で、地域の特性を活かした観光地づくりも活性化した。地域の自主的な力で、自らの地域をつくりあげていくための機運は最高潮に達したものの、それがすべて成功したかという点、疑問も残る。いわゆる「ムラおこし」「まちづくり」「地域づくり」に勢いづいた地方自治体の中には、この掛け声のもと、かならずしも理念・長期的展望をもたずに、過剰に「地域の個性」を演出したハコモノをつくって、観光客誘致を目論むことで「地域活性化」につなげようとしたところも少なくなかった。なかには、自らの財政力を省みずに、地方に雇用の場を生み出すことを目論み、次々と新たな「地域づくり」の事業を展開した自治体もあった。本末転倒もはなはだしいが、そこには借金をして事業をすると、赤字がかさめばかさむほど、地方交付金が増えるといった仕組みがあった。

宮本没後、たしかに、地域が主体になってさまざまな取り組みがなされていったものの、はたして宮本が願った、民衆のエネルギーの高まりにより、自らの地域をつくっていこうとする志を地域の人々は共有していたのであろうか。

「地域開発というものは、本当に自分たちの土地をどうしたらよいかという人たち、真剣に自分たちの土地の問題を、自分たちで解決しようという人たちが育ってこない限り、ありようがない。」

「法ができたから地域がよくなるのではない。地域がよくなろうとする時、法が生きるのである。このことを忘れてはいけない。」

今一度、宮本が伝えようとした言葉の意味をかみしめ、我われが次世代に残し、伝えるべき真の豊かさとは何かを考え直してみることが必要ではないだろうか。

注

- 1) 『離島の旅』1964年、(宮本常一著作集35『離島の旅』<未来社、1986年>所収) p284
- 2) 前掲書1) p285
- 3) 「日本列島にみる中央と地方」1964年(宮本常一著作集2『日本の中央と地方』所収) p43
- 4) 前掲書3) p46
- 5) 農業基本法公布(1961年)による農業切り捨て政策を指して、「農業人口を減らすだけでは問題は解決しない」と明言している。
- 6) 前掲書3) p41
- 7) 前掲書3) p42
- 8) 前掲書3) p60
- 9) 「社会開発の諸問題」1965年(宮本常一著作集2『日本の中央と地方』所収) p189
- 10) 離島振興法を根拠に、国は離島振興計画を策定し、対象となる島嶼における港湾・空港・道路(架橋を含む)・漁港・電気導入・水道・文教施設・医療施設等の離島にとって重要な公共施設の建設に対して、国から高い国庫補助が適用されることとなった。
- 11) 離島振興協議会は離島の首長から成る全国組織
- 12) 宮本常一著作集18『旅と観光』(未来社、1975年) p333~334
- 13) 「おくれをとりもどすために」1955年(宮本常一著作集4『日本の離島』<未来社、1969年>所収) p50
- 14) 「全国離島青年会議に寄せて」1956年(宮本常一著作集4『日本の離島』所収) p64
- 15) 前掲書14) p58
- 16) 宮本常一著作集18『旅と観光』(未来社、1975年) p335
- 17) 宮本常一『民俗学の旅』(講談社学術文庫、1993年) p76~77
- 18) この言葉は、1965年、宮本常一が監修して日経映画社が製作した日本各地の風土を記録したドキュメンタリー「日本の詩情」のナレーションである。
- 19) 前掲書17) p112~113
- 20) 宮本常一と澁澤敏三の最初の出会いは1935年4月である。大阪民俗談話会に突如として訪れた澁澤敏三に宮本は会った。宮本常一28歳の時であり、この出会いが宮本常一の人生を大きく変えることとなった。
- 21) ただし、昭和17年、一時期、宮本常一は胃潰瘍の療養のため周防大島に帰郷している。
- 22) 1939年11月17日朝、島根県松江で汽車をおり、田所村に田中梅治翁を訪ねた。そのついでに中国山地を歩き、12月4日山口県岩国へ出る旅であった。
- 23) 宮本常一著作集25『村里を行く』(未来社、1977年) p9~10
- 24) 前掲書23) p162~163
- 25) 前掲書23) p222
- 26) 戦後の宮本常一の旅は、澁澤敏三からの援助はなく、旅費は自分で稼がねばならなかった。
- 27) 前掲書17) p152~153
- 28) 前掲書17) p153
- 29) 前掲書17) p192
- 30) 前掲書17) p193
- 31) 宮本常一著作集38『周防大島を中心としたる海的生活誌』(未来社、1994年) p21
- 32) 宮本常一『中国風土記』(広島農村人文協会、1958年) p2~5
- 33) 前掲書31) p22
- 34) 前掲書31) p22
- 35) 前掲書9) p190~191
- 36) 「日本の島々」1965年(宮本常一著作集35『離島の旅』<未来社、1986年>所収) p293~294
- 37) 最初、宮本常一は「連盟参加の旅館の提灯持ちなら御免こうむりたい」と考えていたが、とりあえず大野藤之助に会うこととした。
- 38) 宮本常一先生追悼文集編集委員会『宮本常一―同時代の証言』(日本観光文化研究所、1981年) p355
- 39) 前掲書16) p334~335
- 40) 日本観光文化研究所編『観文研二十三年のあゆみ』(日本観光文化研究所、1989年) p7
- 41) 前掲書40) p7
- 42) 前掲書40) p7~8
- 43) 秋葉原にある近畿日本ツーリスト本社ビル7階に一部屋を与えられ、活動が始まった。
- 44) 前掲書40) p7